

糖尿病患者における胃排出

Gastric emptying in the patients with diabetes mellitus: *FD Loo, DW Palmer, KH Soergel, et al* (Gastroenterology 86: 485-494, 1984)

糖尿病患者の胃運動や排出の異常は、diabetic gastroparesis あるいは diabetic gastropathy と呼ばれ、その病態と消化器症状との関連が長年研究されてきているが、まだ一定の見解は得られていない。

著者らは糖尿病患者の慢性的な悪心や嘔吐が胃排出の異常と関連しているか否かを検討すると共に、報告者によって異なる見解の一因となっているアイソトープを用いた胃排出の検査法とデータの分析法について検討を加えている。

検討対象は健康者 18 例とインスリン依存性の糖尿病で神経症を合併している患者 16 例である。糖尿病

患者 16 例のうち 10 例は慢性的な悪心、嘔吐を訴える有症状者 (Group A) で、残る 6 例は無症状者 (Group B) である。胃排出は^{99m}Tc でラベルした試験食投与後、γカメラで胃内残存を測定し、後述する新しいデータ分析法で検討している。

液状試験食による検討: 健康者、糖尿病患者の Group A, B の 3 群間に胃排出の有意な差は認められなかった。しかし、Group A 10 例中 3 例と、Group B 6 例中 4 例にある種の胃排出の異常が認められた。

固形試験食による検討: 予期したごとく、固形食の胃排出は液状食に比しゆっくりで、50% 排出に要した時間は液状食の約 2 倍であった。Group A 患者 10 例中 6 例と Group B 患者 6 例中 4 例は、胃排出能を表す幾つかのパラメーターに異常を認め、健康者より胃排出が遅延していたが、A, B 間に異常パターンの違いはなかった。

以上より、症状と胃排出は直接的な関連はないと結論している。

Metoclopramide の効果: 液状食の排出能に有意の効果を示さなかったが、固形食排出には著しい排出促進効果が認められた。この作用機序は不明であり、また、悪心、嘔吐に対する臨床効果も胃排出への効果よりもこの薬物の鎮吐作用が主と考えられた。

最後に検査法と分析法について、^{99m}Tc の体外への放射透過性が低いことより、試験食が身体の前後方向にあるときの誤差を補うためには腹側からだけでなく背側からのカウントを同時に行い、その幾何学平均をとるべきこと、データをコンピューター解析 (computer-generated curves) による二直線分析することなどを提唱している。

(愛知県がんセンター第 1 内科

伊藤克昭 抄)

Coffee Break

ボロニア紀行

イタリアの北部にあるボロニアは世界で一番古い大学のある所として知られている。病理解剖学の祖として有名なヴェサリウスやモルガニなど幾多の碩学は、ここで教鞭を取りつつ不朽の業績を残した。今を去る 400 年も前のことであるが、今でもその史蹟が、城壁都市の中心にある古い煉瓦づくりの大学の資料館に大切に保存されている。

この歴史と伝統のあるボロニア大学から“胃の前癌病変”と“胃潰瘍と胃癌”についてシンポジウムを持ちたいとの招聘を受け、この 6 月中旬の数日に城所 功・春日井達造両先生と共にやってきた。

会場は大学病院の外来玄関に近い学生用の講義室が当てられ、われわれ 3 人以外の演者や聴衆はすべてイタリア人だったので、レシーバーを当てて英語の同時通訳を聞きながら質疑に応答する始末となったが、3 人ともしばしば質問を受けた。このようなことで討論にはお互いに多少“隔靴搔痒”の感があったが、彼ら

がわが国の早期胃癌についての高い知識と水準とを吸収しようとする熱意がありありと感ぜられ、“来て良かった”と充実感にも浸った。

確かに彼らの持つ早期胃癌の症例数は多いとは言えないし、胃潰瘍と胃癌の関連性に関する知識や経験はわれわれよりも乏しいが、このようなことだけから“古い大学にしては程度が低い”などとうそぶくのはとんでもない間違いで、歴史と伝統の重みと、それに培われたパイオニア精神は今でも彼らの心の中に脈々と生きており、ウカウカできないという印象を持って帰ってきた。

夜は 2 日間とも 9 時ごろから始まる宴席に招待されワインを飲み食事を共にしながら夜の更けるまで語り明かす彼らの生活の中に溶けこんだ習慣にお付き合いするのは、睡眠不足もあっても多少有難迷惑なことでもあったが、楽しい一時だった。イタリア人は好ましい人達だ。

(愛知県がんセンター 長与健夫)